

〔一〕 本論 山之村道（有峰道）を歩く

1、藤橋（藤波橋）から殿へ

舟津町より殿村へ（『飛騨国中案内』）

・舟津町より大川の藤橋を渡り行けば小坂あり、この次は野合なり、字沖之野という所なり、これより殿村の内なり。

・藤橋詰より東南の方へ向い行く道あり、これは殿村というへ行き、それより和佐保村、山之村というへ行道

殿村（『飛騨国中案内』）

・高二百四十七石八斗八升二合、この反別三十九町九反三畝歩、平地の様に少々坂懸り

・家数大小三十六軒あり、内百姓二十八軒、百姓六軒地借、この分家作茅葺屋根なり、二軒寺、樽葺なり、

・二ヶ寺共臨濟宗、内一ヶ寺は京洛西法山妙心寺末にて【円城寺】といい…古跡開基は江馬殿代々牌所なり…江馬殿御治国の砌は結構なる寺にてありしかども、飛州軍乱の砌、その後大破に及び旧跡までかように罷りなり少庵となる、

・一ヶ寺は高山宗猷寺末寺にて【瑞岸寺】という…開基天文四未年なり

・宮森五ヶ所あり【諏訪大明神宮】この境内一反二畝二十八歩【白山権現宮】この境内四畝二十五歩【加茂明神宮】この境内一反二十八歩【天神宮】この境内四畝十一歩【不動明王堂】地一畝十八歩あり

・板橋一ヶ所あり、字不動前という、橋長八間巾二尺あり、引

渡橋なし

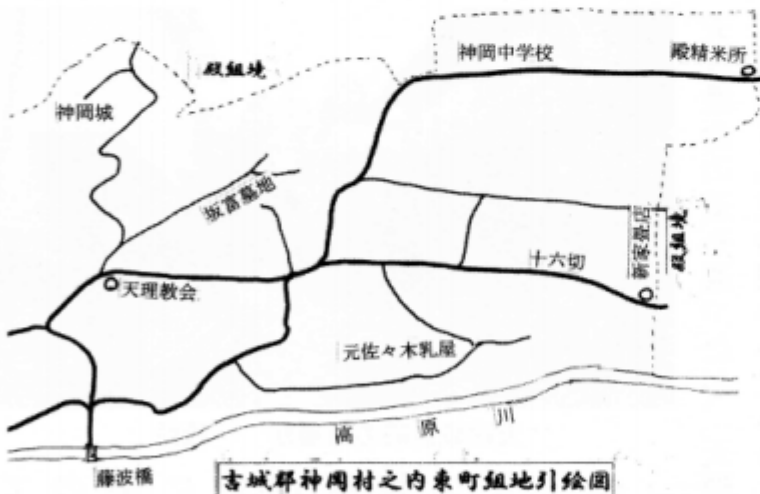
明和三年飛騨国吉城郡殿村差出明細帳

一、家数四十一軒、人数二百四人内僧一人山伏一人、牛十七疋馬八疋

一、稼ぎ農業の間、女は麻布織り申し候、男稼ぎは御座なく候（『神岡町史史料編上巻』）

（1）藤橋（藤波橋）から殿境

新家富康「殿村之歴史」に、明治以前の道路について、次のように記されている。



吉城郡神岡村之内東町組地引絵図

「藤波橋を渡りて現在天理教会のある坂道を上り、城下町を通り、松坂という坂道を通り、現在の中学校校庭添いに殿の精米所へ一直線に約九尺（二、七メートル）幅の道があり、それから宮垣力蔵さんの所を通り…（以下略）」

この道筋は、明治九年の「吉城郡神岡村之内東町組地引絵図」（上図参照）によって裏付

けることができる。

この道筋のうち、「天理教会」のある坂道は、現在もほぼ残っている。「松坂という坂道」については、はっきりしなかった。この付近は、大きく変わったからである。昭和十一年に神岡軌道浅井田線（現遊歩道）が敷かれ、戦後都市計画により道路が付けられ、住宅地化した。

また、荷車やさらには自動車を通れるよう、新たな道筋の県道が高原川沿いに新削・改修され、この松坂道は次第に廃れ、山道のようになってしまったと思われる。

「現在の中学校校庭添いに殿の精米所へ一直線に約九尺（二、七メートル）幅の道」と書かれている道の跡も残っ



天理教会前の街道跡 坂戸

ていない。中学校グラウンドの拡張や都市計画による住宅地化（江馬町・桜ヶ丘）により、消えてしまった。ただ、神岡中学校（始め船津中学校）は昭和二十二年開校であり、校庭から殿の精米所への一直線の道については多くの方が覚えてくれた。

案内をして頂いた殿在住の新家康孝さんは、

「子供の頃、町へ行く時は、天理教会の道も通ったが、天理教会の方へ回らず、現坂本邦貞さん宅の向かいにある土蔵裏へと下り、高原川沿いに藤波橋へ出た」とのこと。（前記「東町組地引絵図」参照）

「祖母の使いで野菜を背負って町へ行き、帰りに藤波橋の近くの『おおやさんべ』で菓子を買って貰えると嬉しかった」と語られた。

ところで、梶下ヒナさんは、「ちよつと昔の船津の町」に、次のように証言しておられる。ひなさんは明治二十八年生まれで、子供の頃（西里橋がまだない頃）の様子を述べておられる。

「橋場（藤波橋付近）は、当時家は十一戸で、下に水屋や川、